

学 外 研 修 報 告 書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報 告 日	2025 年 5 月 30 日	所 属	外国語学部フランス語学科 (旧)
職 名	准教授	氏 名	根木 昭英 
研修種別	①. 海 外 2. 国 内	研修種類	①. 長 期 2. 短 期
研修期間	2024 年 4 月 1 日 ~ 2025 年 3 月 31 日		
学外における主な研修機関および訪問先 フランス語フランス文学研究センター (CELLF) (フランス・パリ)			
出張目的または研究題目 ジャン＝ポール・サルトルおよびアンドレ・マルローを中心とする 20 世紀フランス文学研究			
資 格 ①. 年度獨協大学学外研修員 (派遣) 2. 本学承認の学外研修員 (自費等) 3. その他 ()			
大学から支給された費用 (要清算書類)・補助金額 300 万円 (退職に伴い全額返還済)			
研修内容 (1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入) 学外研修開始予定日であった 4 月 1 日より数日前に渡仏し、とくに大きなトラブルもなく、入居予定のパリのアパートに入居して学外研修を開始することができた。今回の学外研修における受け入れ機関はソルボンヌ大学およびフランス国立科学研究センター (CNRS : Centre national de la recherche scientifique) の共同研究ユニットであるフランス語フランス文学研究センター (CELLF) であり、受け入れ研究者は報告者の元博士課程指導教員で面識のある Jean-François Louette ソルボンヌ大学教授であったという事情もあ			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

り、スムーズに学外研修をスタートすることができた。

研修の前半には、これまでも取り組んできた 20 世紀フランスの思想家ジャン＝ポール・サルトル (1905-1980) の研究に継続して取り組んだ。これまでに「ポエジー」の概念を軸として行ってきたサルトル研究の単著化の予定がややずれ込んでいるという事情があることから、その作業が中心となった。単著化にあたってはフランスの出版監修者より、内容面における修正提案、またとりわけ、出版予定の叢書の分量規定に合わせた現行分量の縮減要請があり、それに沿った修正の作業を行う必要がある。実際の作業にあたっては、これまでの研究をもととした原稿について、内容を維持しつつ分量を半程度に縮減することが求められたため、原稿の全面的な見直しと再執筆が必要となり、この作業にかなりの時間が必要となった。この縮減作業に関しては現在も進行中であり、可能なかぎり早く完成させたうえで刊行に漕ぎつけたいと考えている。

以上にくわえ、とりわけ年度の後半には、新たな研究対象である作家アンドレ・マルローに関する研究も進めた。最大の目的は、マルローの著作を通底する、美学と倫理との一貫した思想体系を再構築することであるが、具体的には、一次資料となる美術論 (『沈黙の声』、『世界彫刻の空想の美術館』、『神々の変貌』三部作) の精読が作業の中心となった。これらの著作は、繰り返しの改訂による版の異同を含む複雑な成立過程を経ていく。そのことから、研究の目的である美学論の再構築のため、文学論にも接続可能な「声」「呼びかけ」といったテーマに着眼しながら、書誌情報と内容を整理して精読する作業を行った。これらについても作業は継続中である。

さらに、サルトルと、同時代の作家バタイユとの関係を主題とする論考の執筆依頼があり、その執筆を進めた。サルトルとバタイユとの関係は、一般に、バタイユの『内的経験』に対するサルトル「新しい神秘家」の厳しい批判という対立構造で捉えられることがほとんどである。しかし当該論考では、こうした対立関係を踏まえつつも、その後のサルトルの著作、とりわけボードレーやジュネといった他作家について論じた批評群において、バタイユとの論争において用いられた語彙 (とりわけ「不可能なもの」「ごまかし」といった語彙) が再び用いられている点に着目し、両作家の関係が単純な対立関係とは言えないことを示すべく試みた。一方で、これらの語彙の取り上げなおしが、バタイユによるサルトルへの影響関係と解釈するべきものというよりは、むしろサルト

ルによるバタイユ的語彙の自由な再解釈による取り上げなおし、すなわち「我有化 (appropriation)」と呼ぶべきプロセスであることも確認した。サルトルとバタイユとの関係が、単純な論争関係ではない一方で影響関係と呼ぶべきものでもなく、「論争における対話」ともいうべき関係性であることを示すことができる予定である。以上の原稿は、さらに手直しを行ったうえで25年夏ころに依頼者へと提出し、その後論集の一部として出版される予定である。

以上の研究にくわえて、研究書の書評の執筆等を行ったほか、フランス滞在を活用して資料の収集にも努めた。とりわけ、新しい研究対象であるマルローに関してフランス語二次文献の収集を集中的におこない、日本からは入手の困難なものを含め、多くの研究書や論考などを購入・複写して整理することができた。さらに、9月に日本に一時帰国をして、参照が必要となった日本語資料を入手、複写することも行った。これらの資料は今後の研究において大いに活用されることになる見込みである。

さらに、留学中も例年参加していたフランスサルトル学会などの研究集会にも積極的に参加し、世代の近い何人かの研究者と面識を得ることもできた。とりわけ、以前よりやりとりのあった新ソルボンヌ大学の Guillaume Bridet 新ソルボンヌ大学教授と何度か面談し、サルトル研究および最近のフランス文学の研究動向について意見交換できたことは大きな収穫であった。教授とは今後も研究協力を行っていく予定である。

異動といった事情もあったことから、3月いっぱいまでという当初のフランス滞在の予定からは少し早めに帰国することとなったが、当初の目的であった現地研究者との交流や資料収集、またシンポジウムへの参加などは十分に行うことができ、たいへん充実した学外研修の期間になったと考えている。

最後に、こうした貴重な研究の時間とフランス滞在の機会を与えていただいた獨協大学に、あらためて、心よりのお礼を申し上げたい。